

九州大学附属図書館所蔵「近藤文庫」について

山根, 泰志
九州大学附属図書館

<https://doi.org/10.15017/18233>

出版情報：中国哲学論集. 35, pp. 55-68, 2009-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館所蔵「近藤文庫」について

山 根 泰 志

はじめに

九州大学附属図書館中央図書館所蔵「碩水文庫」は、肥前針尾（現長崎県佐世保市）の人で平戸藩儒の楠本碩水（名は孚嘉、通称は謙三郎、一八三二～一九一六）の旧蔵書であり、宋明理学の書、崎門諸儒の著述を特色とし、九州大学を代表する特殊文庫の一つである。¹ 碩水の兄である楠本端山（名は後寛、通称は確蔵、一八二八～一八八三）の孫にあたる法文学部楠本正継教授（一八九六～一九六三）の斡旋により、昭和八年（一九三三）に購入されたものであり、翌九年（一九三四）には『碩水文庫目録』が作成されている。その後も九州大学では、楠本教授の尽力により近世儒学関係書籍が蒐集されるが、中央図書館所蔵ではこの碩水文庫しかこれまで知られていなかった。ところが、平成二〇年（二〇〇八）六月二〇日に中央図書館で開催された第九回貴重文物講習会「近世儒学関係諸文庫について」（講師：九州大学大学院人文科学研究院柴田篤教授²）を契機として、中央図書館保存書庫に混排された和漢古書の中に、幕末明治期漢学者の旧蔵書がいくつも存在することが判明した。³ 本稿は、それら忘れられた文庫のうち、碩水文庫と特に関係が深い近藤文庫につき、文庫の概要、受入経緯、旧蔵者の略歴、蔵書の特徴について、現時点での調査結果を報告するものである。

一、近藤文庫概要

近藤文庫は、楠本碩水の同庚の親友で、楠本家と親戚関係にある平戸藩士近藤畏斎（名は久敬、一八三二〜一八九一）の旧蔵書である。独自の分類を付与され、別置されている碩水文庫と異なり、通常の図書と同じ分類を付与され、中央図書館保存書庫（一部は貴重書庫）に混排されていたため、現在ではその存在すら忘れられていた。前述の第九回貴重文物講習会の直後、中央図書館の総合目録カードに「近藤文庫」の印があること、碩水文庫と同じく宋明理学の書、崎門諸儒の著述が多いこと、「畏斎蔵書」の蔵書印が多数捺されていること、畏斎の弟である近藤思斎（名は久徴、通称は収蔵、一八四五〜一九〇二）の自写本が含まれていること等が判明したことからその存在が明らかになった。碩水文庫受入の翌年の昭和九年（一九三四）に、碩水文庫と同様に福岡市内の書店積文館を介して購入され、その後二度の追加購入が行われている。中央図書館所蔵の『九州帝国大学附属図書館図書原簿』によれば、受入日・数量・金額は次の通りである。

昭和九年十一月十五日 三五七部 二〇一六冊 五四六円九〇銭

昭和十一年十二月五日 十三部 一八六冊 一五六円

昭和十三年三月二五日 二六部 四二冊 六一円四三銭

近年、書庫から『春秋集伝大全』の十二冊目が発見され、近藤文庫蔵『春秋集伝大全』の十二冊目が欠けており、かつ版面も同じことから、受入の際に漏れたものであることが判明した。それを加えると、総計は次の通りである。

三九六部 二二四五冊 七六四円三三銭

文庫印については、総合目録カードに「近藤文庫」の印が捺されているが（昭和十一年追加分にはカード裏に「近藤文庫」の書入れ、昭和十三年追加分にはカード裏に「樋口」の書入れ）、文庫所蔵書籍には捺されていない。

近藤文庫は碩水文庫を補充する崎門写本の一大コレクションであり、他の文庫に比べても遜色のあるものではないが、前述のように現在では忘れられていた。昭和五十六年（一九八一）に国文学研究資料館から『古典籍総合目録』

作成に係る所蔵資料の調査についての依頼があり、それに関係する書類をまとめた「和古書・古文書学内所蔵調査書」と書かれた封筒の中に、過去になされた文庫調査をまとめた綴りが収められており、その冒頭に昭和二十四年（一九四九）頃作成された「文庫調査書」なる一枚の書類が綴られていた。所蔵文庫の数量・価格・購入年等を記入したものであり、そこには、碩水文庫、西田文庫と並んで近藤文庫が記入されており、少なくともこの頃までは文庫の一つとして把握されていたことがわかる。しかし、この書類に続いて、「学内所蔵主要文庫一覧」（『図書館情報』二一七、一九六六）と、それをベースにした昭和四十九年（一九七四）八月の年次が入った文庫調査の書類が綴られているが、いずれも近藤文庫は入っていない。さらに、国文学研究資料館からの依頼に伴い、昭和五十六年に調査された文庫の中にも、多数の古典籍を含むにも関わらず近藤文庫は入っていない。忘れられた凡その理由については別稿で述べたが、近藤文庫については、この「文庫調査書」の存在といい、総合目録カードの文庫印といい、その存在を示すものが残されていただけに、忘れられて今に至ったことは誠に残念である。

二、文学部所蔵近藤畏斎旧蔵書

『碩水文庫目録』の巻頭に掲載されている楠本正継筆「碩水文庫に就て」¹⁰に、「然れども先生歿後は其蔵書次第に散出せるものあり、例へば明嘉靖本三礼鄭注の如きものは既に睹ることを得ず。朝鮮刊本理学通録、明刊本道南源委録等は嚮に本学支那学研究室に帰す」と、碩水文庫受入以前に、法文学部支那学研究室（現文学部中国哲学史研究室）に、碩水の蔵書が収められていたことが記されている。総合目録カードを見ると、このうち、『理学通録』については、昭和五年（一九三〇）九月十日に碩水の子の楠本正脩（一八七五〜一九三三）から購入しているが、『道南源委録』については、確かに本には「碩水蔵書」の蔵書印が捺されているものの、納入者は近藤静野となっている。近藤静野は、思齋の子の好徳（一八八四〜一九一九）の室である。また、『九州帝国大学附属図書館図書原簿』を見ると、近藤静野から納入された書は昭和七年（一九三二）九月十日に『道南源委録』等六部、同年十二月十日に『春秋胡伝』

一部があるが、そのうち五部に「畏齋藏書」の蔵書印が捺されている。¹²これらは近藤畏齋の旧蔵書ということができ、近藤文庫に「碩水蔵書」の蔵書印が捺されている書が含まれていることからすれば、この碩水旧蔵の『道南源委録』も近藤家由来のものとするべきである。つまり、碩水文庫同様、近藤文庫として受入れられる以前に、畏齋の蔵書の一部が支那学研究室に収められていたことになる。

三、受入の背景

近藤文庫の購入を斡旋したのは、楠本家と近藤家との関係の深さから、碩水文庫同様楠本正継教授と見るべきであり、受入れ以前に畏齋の蔵書の一部を支那学研究室が購入していた事実もそれを傍証する。また、碩水文庫の購入は、碩水の子の正脩が昭和八年（一九三三）三月十一日に没したことを契機とするが、¹³その時近藤家は、思齋の子の好徳と直輔（一八八七〜一九一七）が既に早世しており、以前から関係者の間で蔵書の散佚が危惧されていたと考えられる。その「関係者」で注目されるのが、畏齋の甥の岡次郎（号は彪邨、一八六四〜一九四九）¹⁴と娘婿の益田祐之（号は古峯、一八六六〜一九四四）¹⁵である。二人は碩水文庫受入に関わったと見られるから、¹⁶近藤文庫受入の際も楠本教授に協力した可能性が高い。近藤文庫が碩水文庫とセットのように受入れられたのは、¹⁷以上のような背景が考えられる。明治四十年（一九〇七）、針尾を訪れた大阪朝日新聞主筆西村天囚（名は時彦、一八六五〜一九二四）は、端山・碩水・近藤氏三家の蔵書を称え、「針尾は其れ九州の小西山なるかな」と評した。¹⁷僻村の針尾に夥しい珍書奇籍が蔵せられていることを、中国湖南省にある小西山の麓に、書千巻を秘蔵した洞穴が存在するという伝承に擬えたものである。この三家の蔵書によって、針尾は僻村ながら学問をする環境が整っていたわけである。九州大学に碩水文庫と近藤文庫を置くことは、「九州の小西山」の再現を目指すものであり、事実その後も楠本教授の尽力により、近世儒学関係書籍が蒐集されていくことになる。

四、近藤畏齋について

近藤畏齋の伝については、畏齋没後十年にあたる明治三十四年（一九〇一）三月に親友碩水によって執筆された「近藤信卿伝」（『碩水先生遺書』巻七）が詳しい。この伝を基にして畏齋の生涯を追ってみた。

近藤畏齋は天保三年（一八三二）八月十四日に平戸藩士近藤新右衛門（名は正堅、号は竹齋、一七八六～一八七二）の子として針尾島（現長崎県佐世保市針尾中町）に生まれる。名は久敬、字は信卿、通称は三郎（後勇三郎、惺蔵）、号は畏齋。父新右衛門は、鴨川家を継いだ端山の伯父嘉一兵衛（号は嚴齋、一七八五～一八四三）の婿養子となり、些か文字に通じていたので、端山・碩水・畏齋・思齋等、楠本・近藤兄弟に句読を授けた。岡次郎は、僻村の針尾から次々と大学者が出た理由として、この新右衛門の存在をあげている。¹⁸

長じて端山次弟の山田梅窓（通称は鼎二郎、一八三〇～一九〇二）とともに久留米に遊学し、¹⁹また、以前から端山から学んで程朱学を慕い、文久元年（一八六一）、肥後の月田蒙齋（名は強、一八〇七～一八六六）に入門し、崎門学を学ぶ。

文久三年（一八六三）、藩主松浦氏の姻戚である公卿中山忠能（一八〇九～一八八八）邸の護衛のため京都に派遣され、元治元年（一八六四）の禁門の変の後帰藩し、通称を勇三郎から惺蔵に改めた。²⁰慶応元年（一八六五）、近侍となり、又藩学訓導に転じ、明治元年（一八六八）、羽州出征には書記として従軍し、明治三年（一八七〇）、山田梅窓とともに記録編集掛に命じられ、嘉永六年（一八五三）以来王事に関する件、羽州出征に関する件の取調に従事した。²¹同年七月の京都大学校廃止に伴い、碩水は大学少博士を免ぜられ、京都から針尾に帰り、役職と家禄を辞して郷里にて隠逸生活を始めるが、畏齋も同じ頃致仕して帰郷した。²²

佐々家に養子に出ていた碩水は、「異姓を冒さざるは、是れ孝の第一義なり」として、²³明治二年（一八六九）に佐々姓から本姓に復しているが、畏齋も同様に近藤家の者が鴨川の姓を冒すのは間違っているということ、明治十二年（一八七九）、碩水に嘉一兵衛の後継となることを要請した。無論碩水も承知しなかったが、端山が調停して遂に引き

受けることになった。これにより、従来小作米は碩水三十五俵、近藤家三百俵だったのを、碩水百五十俵、畏斎百五十俵、思齋八十俵となり、碩水もどうにか暮らしていけるようになったという。²⁴

晩年の端山が企図した鳳鳴書院設立にも積極的に協力し、建設資金も提供している。²⁵ 鳳鳴書院の運営方法についての端山の試案によれば、畏斎は「監督」とされており、「監督」の職掌は「院内庶務ヲ閲掌シ、會計ノコトマデ掌ドル」となっているが、²⁶ 近藤文庫蔵『性理群書句解』に塾の会計書類の折込が入っていることから、少なくとも畏斎は試案通り会計を掌った模様である。

近藤畏斎は、明治二十四年（一八九二）十月二十九日、六十歳で没した。弟思斎の次子直輔が後嗣となったが、前述のように早世した。娘の静は没する二年前の明治二十二年（一八九九）に益田祐之のもとに嫁いでいる。²⁸ 楠本正翼「復岡彪邸書」（『鳶魚齋詩文』²⁹）に、「近藤表伯叔、文辞を用功せずして遺文存せず、後学の不幸と為る」とあるように、³⁰ 崎門学者らしく、著述を事としなかったためか、現在のところ畏斎の著作は見出しえない。畏斎が葬られている針尾の近藤家墓地は、楠本家墓地に隣接する一つ上の段にあり、³¹ 両家の関係の深さを今に伝えている。

五、蔵書の特徴

現在のところ近藤文庫独自の目録は見つかっていないため、『九州帝国大学附属図書館図書原簿』から近藤文庫を抽出したりリストに総合目録カードの情報を追加した簡易目録を作成し、それを附属図書館で構築している「九州大学所蔵コレクション目録データベース」³² 上で平成二十一年三月より公開している。書名・著者名程度の簡単なものだが、可能な限り蔵書印や奥書等の伝来に関わる情報を入力している。これらを元に蔵書の特徴や凡その成り立ちを見てみることにする。

近藤文庫には、畏斎の父新右衛門とその養父嘉一兵衛の自写本と「近藤正堅蔵」の書入れがある書が認められる³³ので、父祖から継承した蔵書も含まれているが、宋明理学の書、崎門諸儒の著述が大半を占めていることから、崎門学

者である畏齋・思齋兄弟の蒐集にかかるものがほとんどであろう。宋明理学の書は、『延平問答』(中村惕齋旧蔵)、
『黄勉齋先生文集』(碩水旧蔵)、『文敬胡先生集』(碩水旧蔵)、『学部通弁』(『安東省菴集』影印編Ⅱ(柳川文化資料
集成第二集、二〇〇四)の影印底本)、『困辨録』等百部を越え、和刻本がほとんどであり、一部唐本・写本が含まれ
る。崎門諸儒の著述は百三十部を越え、その内の半数以上が写本である。佐藤直方(二六五〇〜一七一九)・浅見綱
齋(名は安正、一六五二〜一七一一)・三宅尚齋(名は重固、一六六二〜一七四一)の崎門三傑のうち、畏齋は三宅
尚齋の学統に属する月田蒙齋から崎門学を学んでいるので、『属論語諸説』(尼崎修齋旧蔵)、『孟子発端口義』、『大学
章句筆記』(上原立齋旧蔵)、『晋齋先生答問』(小川晋齋自筆)、千手卓齋著『読祭祀来格説考説 附読中庸序考説』等、
三宅尚齋及びその門流の講述の写本が最も多い。それに比して佐藤直方・浅見綱齋及びその門流の著述はそう多くは
なく、写本の割合も低いが、佐藤直方述『易乾卦本義講義』(小川晋齋写)のように珍しいものも含まれている。ま
た、畏齋が入門した月田蒙齋及び思齋が入門した池田草庵(名は緝、一八一三〜一八七八)の著述の写本も収蔵され
ており、これらの多くは従学中に筆写あるいは入手したものとされる³⁷⁾。

これら宋明理学の書、崎門諸儒の著述以外の書に捺されている蔵書印を見ると、折衷学派の儒者で松浦侯から賓師
の礼を受けた朝川善庵(名は鼎、一七八一〜一八四九)の旧蔵書が目立つ。善庵の孫で端山門下の片山修堂(名は寿、
一八三七〜一九一三)の旧蔵書も近藤文庫に含まれていることから、修堂との関係で入手されたものではないかと推
定される。特に『新語』、『塩鉄論』、『風俗通義』、『博物志』等、漢代から六朝に成立した書の和刻本が多く、近世儒
学に偏った近藤文庫の蔵書に一定の幅を与えている。

近藤文庫は、畏齋・思齋それぞれが入手あるいは使用したためか、刊写を問わず同じ著述で複数の本が収蔵されて
いることが多い。もちろん碩水文庫蔵本とも重なることが多く、その中には『三宅先生行状』のように、碩水文庫本
を転写したと見られるものもあり、³⁸⁾『訂翁三部書』のように、近藤文庫本が碩水文庫本の対校に用いられたものもあ
る。³⁹⁾楠本・近藤両家が、写本の入手や校合のために常日頃それぞれの蔵書の貸借につき便宜を図っていたことを窺わ
せる。そして今、両家の蔵書が同じ図書館に収蔵されていることにより、彼らがそうであったように、諸写本等の校

合などの便宜を我々も享受することができるのである。

おわりに

「同庚（生年） 同里（郷里） 同学（学問）」にして、志同じく道同じきこと、始終一日の如き（「近藤信卿伝」）関係にあった楠本碩水と近藤畏斎の二人の蔵書は、これまた同じく九州大学附属図書館に収められた。さらに畏斎の娘婿の益田祐之の旧蔵書も、益田文庫として昭和四十一年（一九六六）九州大学附属図書館教養部分館に受入れられ、六本松キャンパスの移転に伴い、平成二〇年（二〇〇八）に中央図書館に移されている^④。これら関係の深い文庫が同じ図書館に収蔵されていることは意義深いことであり、殊に同書異写本があるなど、崎門学研究上極めて貴重な資料を含んでいると言える。今後の活用のためにも目録の整備が大いに期待されている。最後に、楠本碩水が著した「近藤信卿伝」の末文を引用し、二人の崎門学者の友情を偲びつつ、本稿を終えたい。

余、君と交わること^{ただ}啻に兄弟の如きのみならずして、未だ嘗て一言一語の相忤^{きかち}うことも有らざるなり。蓋し君を知る者、余に如くは莫くして、余を知る者亦た君に如くは莫し。乃ち是の伝を撰し、以て世世忘ること勿^なからしむるなり。明治三十四年三月。

〔注〕

- (1) 碩水文庫については、柴田篤「碩水文庫余滴―楠本正継教授と九州大学附属図書館―」『中国哲学論集』三三、二〇〇七）を参照。楠本碩水については、藤村禪『楠本碩水伝』（芸文堂、一九七八）を参照。
- (2) 配布資料 URL: <http://hdl.handle.net/2324/10625>
- (3) 拙稿「忘れられた文庫たち―中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群―」『九州大学附属図書館研究開発室年報』二〇〇八／二〇〇九、二〇〇九）を参照。

(4) 「目録カード画像検索システム」 (<http://card.lib.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/frame.cgi>) より、インターネット上から検索・閲覧可能である。

(5) 「樋口」の意味は不明だが、これらに「畏斎蔵書」印が捺された書が六部、近藤思斎の自写本が三部含まれていることから、近藤文庫の追加であることは間違いない。

(6) 便箋の印刷年次が昭和二十三年（一九四八）七月であること、漢字が旧字体であること、一番新しい文庫が昭和二十四年（一九四九）受入の細川文庫であることから、この頃作成された書類と思われる。

(7) ただし、数量・価格等に追加購入分は入っていない。

(8) この「一覽」は後の『九州大学附属図書館要覧』の「学内所蔵主要文庫」欄（二〇〇五／二〇〇六まで存在）のベースになつたため、これに入らなかつたほとんどの文庫は忘れられることになつた。

(9) 前掲拙稿「忘れられた文庫たち——中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群——」。

(10) 前掲柴田篤「碩水文庫余滴——楠本正継教授と九州大学附属図書館——」を参照。

(11) 現在所在不明とのことである。

(12) 内訳は次の通りである。

『道南源委録』（支哲／五一／一三・貴重） 明嘉靖四十一年序刊本 印記：「懶齋」（満田懶齋※）「妄疑齋蔵書」（沢田一齋）「碩水蔵書」

『儀礼鄭注』（支哲／四／六） 印記：「畏斎蔵書」「艮岳院」「南弘房」

『儀礼経伝通解』（支哲／四／七） 印記：「畏斎蔵書」

『周子全書』（支哲／五一／一〇五） 印記：「畏斎蔵書」

『張子全書』（支哲／五一／一〇六） 印記：「畏斎蔵書」

『列仙伝』（支哲／二二／一六） 現在所在不明

『春秋胡伝』（支哲／五／三・貴重） 明嘉靖三十五年広東崇正堂刊本 印記：「畏斎蔵書」「源公訥蔵書印」等

※『道南源委録』には、「慶安元年戊子季□□(虫損)十日懶齋謹誌「印」」なる奥書がある。奥書の印は虫損により印影の大半を欠くが、残存部分は川口文庫本『菅家文草』の「懶齋」印と同じ。『菅家文草』の奥書は藤井懶齋とされるが(柳澤良一編『菅家文草』明暦二年写藤井懶齋自筆奥書本)勉誠出版、二〇〇八)、大和郡山藩儒滿田懶齋(一六一一〜一六八一)の誤り。島本昌一「池田正式の論―怪異小説『あやし草』の作者をめぐって―」(『連歌俳諧研究』五九、一九八〇)を参照。

(13) 前述の「碩水文庫に就て」にあるように、碩水の蔵書は既に散佚しつつあり、蔵書を引き継いだ正脩の死は、それに益々拍車を掛けるからである。

(14) 岡次郎は平戸藩土岡直温と畏齋の妹竹の子であり、二歳にして父直温を不慮の事故で喪った次郎を引き取って育てたのが伯父の畏齋である。平泉澄「岡彪邸先生」(『続々山河あり』立花書房、一九六二)を参照。

(15) 益田祐之とその旧蔵書である益田文庫については、柴田篤「益田古峯小伝―九州大学「益田文庫」の旧蔵者―」(『中国哲学論集』三四、二〇〇八)を参照。なお、益田文庫蔵『鶴林玉露』に「畏齋蔵書」の蔵書印が認められるように、益田文庫にも畏齋の蔵書が含まれている。

(16) 郵便切手管理のための帳簿である『郵便切手受払簿』が中央図書館に残っており、どのような内容の郵便物を送ったかは記録されていないが、誰に送ったかは記録されているため、附属図書館が当時のような相手と交渉していたかを知る上で有用な資料である。昭和九年(一九三四)十一月八日に、「楠本碩水先生御遺族」が受信先として見え、それ以外に宮内省図書寮、内閣文庫等の古典籍収蔵機関、さらには狩野直喜、小島祐馬、宇野哲人等の中国学の大家の名前が見える。時期から推して『碩水文庫目録』を発送したものと思われる。受信先の中に岡次郎と益田祐之の名前が見えるが、碩水門下で送られているのは彼らだけということは、二人が碩水文庫受入に特に関わったことを示唆している。実際岡次郎は『碩水先生遺書』等の碩水関係書を同年十二月、翌年七月に寄贈しており、それらは碩水文庫に追加されている(前掲柴田篤「碩水文庫余滴―楠本正継教授と九州大学附属図書館―」を参照)。益田祐之も同年の七月と八月に岡次郎が出版した『南狩録』を寄贈している。そもそも益田祐之は、九州大学教授の中の文人や市井の墨客からなる「五月会」の会員でもあり(益田豊彦

「亡父益田祐之のこと―益田古峯漢詩鈔刊行に際して―」（『修猷』九九、一九六七、『菁莪特集号』修猷館同窓会、一九八五に所収）、楠本教授との関係以外にも九州大学とは縁が深く、翌年十一月の九大吟詠会で漢詩の講師も務めている（『九州帝国大学新聞』一三八、昭和十年十一月二十日）。

(17) 西村天囚著、菰口治校注『九州の儒者たち…儒学の系譜を訪ねて』（海鳥社、一九九二）一〇八〜一〇九頁。

(18) 岡直養「針尾島の学者楠本碩水先生」（『伝記』四一、一九三七）、蒲生春里「彪村翁茶話」（『平戸之光』四一、一九四〇）を参照。

(19) 楠本端山「詩稿三」（秋田義昭・岡田武彦「楠本端山遺書未収草稿 その六」（『活水論文集』日本文学科編二七、一九八四）に、「今浦某、近藤某、学剣於米藩」とある。『碩水先生日記』に、嘉永二年（一八四九）四月十八日、久留米に宿した碩水に、梅窓、畏齋、今浦伴助、鳴海市兵衛の来訪があったことが記されているが、この今浦伴助が「今浦某」のことであれば、「近藤某」は畏齋のことだろう。「又撃剣を善くし、其の秘奥を極め、其の他の武技も亦た通ぜざる無し」（『近藤信卿伝』）といわれる畏齋の武技は、久留米で磨かれたものと思われる。

(20) 『中山忠能日記』一一三（東京大学出版会、一九七三）を参照。

(21) 『松浦詮伯伝』（松浦伯爵家編修所、一九三〇）を参照。

(22) 端山の碩水宛書翰によれば、畏齋の母の喜良が同年一月二十七日に亡くなったことを機に致仕を考えたようである。岡田

武彦「楠本端山書翰」（『九州文化史研究所紀要』十四、一九六九）を参照。

(23) 「不冒異姓是孝之第一義」（『碩水先生遺書』巻八「随得録一」）。

(24) 前掲岡直養「針尾島の学者楠本碩水先生」。

(25) 碩水「鳳鳴書院記」（『碩水先生遺書』巻六）を参照。

(26) 前掲藤村禅「楠本碩水伝」。

(27) 「八月塾用」とあり、八月分の収支が記録されている。塾生として平山常彦、大石雅次郎、末武千太郎、阿部虎太郎、河添一江及び端山の子楠本正翼（号は海山、一八七三〜一九二二）、端山の甥楠本正徹（号は七生子、一八七五〜一八九七）

の名前が見える。前者五名は正翼によって編纂された碩水門人録である「登門録」（長崎歴史文化博物館楠本文庫所蔵、岡田武彦等編『楠本端山・碩水全集』（葦書房、一九八〇）及び『佐世保市史』通史編上巻（佐世保市、二〇〇二）所収）に名前がある。また、楠本正翼の鳳鳴書院入門は明治十六年（一八八三）二月であり（柴田篤『楠本海山覚書—ある崎門学者の生涯と著述—』（香椎鴻『四九、二〇〇三）、楠本正徹の上京は明治二十一年（一八八八）なので、『東亜先覚志士記伝』下、黒龍会出版部、一九三六）、その間に作成された書類と思われる。

(28) 益田豊彦「あとがき」（『益田古峯漢詩鈔』益田古峯漢詩鈔刊行会、一九六七）。なお、楠本正翼筆『日記』（長崎歴史文化博物館楠本文庫所蔵）に、明治二十五年（一八九二）十月二十七日、畏斎の小祥祭（一周忌）のために、益田祐之が針尾に来たことが記されている。

(29) 柴田篤『鳶魚齋詩文』—明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿—（『九州中国学会報』三三、一九九五）。なお、十一歳にして父端山を喪った正翼を引き取って句説を教えたのも畏斎である。岡田武彦『楠本端山—生涯と思想—』（積文館書店、一九五九）を参照。

(30) 「近藤表伯叔不用功文辞而遺文不存、為後学之不幸」。

(31) 久田美好「端山・碩水先生の墓地について」（『針州』十二、一九八八）、平川定美「楠本家墓地探訪記」（『郷土研究』二七、佐世保郷土研究所、二〇〇〇）を参照。楠本家墓地は儒教式を残すことで知られるが、近藤家も夫人の墓は別で、その碑名も実家の姓で刻されている。

(32) URL: <http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta-pub/G0000002MANULIB>

(33) 近藤文庫蔵本に捺された蔵書印については、「九州大学蔵書印データベース」（<http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta-pub/G0000002STAMP>）にて公開している。

(34) 『東照宮御遺訓』、『後藤名誉伝』等。

(35) 『作詩字例』等。

(36) 『崎門学脈系譜』巻四。

(37) 月田蒙齋著述の写本は『易学啓蒙先天図説』、『海気深処詩藁』、『蒙齋隨筆』(二部)があり、池田草庵著述の写本は『尚書蔡伝贅説』、『尚書蔡伝贅説補』、『読易録』、『読易録次編』がある。なお、『尚書蔡伝贅説補』については、『池田草庵先生著作集』(青谿書院保存会、一九八二)の影印底本となっている。

(38) 近藤文庫蔵『張南軒先生文集抄』には、思齋が明治元年(一八六八)に池田草庵の私塾青谿書院で筆写したことが奥書に見えるが、これら草庵の著述についても同様に従学中(一八六七―一八六九)に筆写された可能性が高い。

(39) 碩水文庫蔵『三宅先生行状』は、寛政六年(一七九四)に小川晋齋が筑後上妻郡古賀氏蔵本を写したもので、筆跡も前掲の晋齋自筆写本と一致している。近藤文庫蔵『三宅先生行状』はそれを転写したものである。

(40) 近藤文庫蔵『訂翁三部書』は、伊予松山藩の崎門学者三上是庵(名は景雄、一八一八―一八七六)が写した本を鈴木重慎が写し、それをさらに明治二年(一八六九)に大原友仁が写したものであり、三上是庵の書入れもそのまま写されている。

久米訂齋著『四部書』と同内容だが、目録に「三部書」とあり、題箋には『訂翁三部書』と墨書されている(原題箋ではなく、図書館が貼ったもの)。碩水文庫蔵『久米訂齋四部書 講義附』は、『訂翁三部書』とは異本だが、「祭祀來格論」部分の書入れは『訂翁三部書』のそれと重なっており、『訂翁三部書』と対校したと思われる異本注記が認められる。畏齋所蔵の『訂翁三部書』を参照したものと思われる。

(41) 前掲柴田篤「益田古峯小伝―九州大学「益田文庫」の旧蔵者―」を参照。なお、和漢古書以外の洋装本は伊都キャンパスの伊都図書館に移されている。

[附記] 近藤文庫の調査にあたっては、九州大学大学院人文科学研究院柴田篤教授には「近藤信卿伝」の読解をはじめとして、多くのご指導とご教示を賜った。また、針尾までお連れ頂き、楠本家・近藤家墓地、楠本端山旧宅及び鳳鳴書院をご案内頂いた。その際、元針尾小学校校長吉田ハルエ氏には大変お世話になった。附属図書館の上司・同僚の方々にも、第十七回貴重文物講習会で報告の機会を与えていただくなど、様々なご支援を頂いた。記して御礼申し上げる次第である。

